シリーズ たむら 人郷夢ストーリー

まちづくりには、市民と行政の協働が不可欠といわれています。しかし、私たちは、地元の市民活動について、どのくらい知っているでしょうか。

このコーナーでは、まちづくりなどの活動に取り組んでいる市民の方やグループにお話を伺い、活動内容や活動にかける思いをシリーズで紹介します。

今回は、ひまわり会 会長 佐久間辰一さんにお話を伺いました。

ひまわりのような人間関係を

大越町牧野地区では、平成5年からほ場整備が実施され、営農体系が大きく変わりました。整備には賛成でしたが、一方で田園風景が大きく変わり、緑が減ってしまいました。また、兼業農家が大半になり、住民同士や世代間の交流が少なくなったと感じていました。

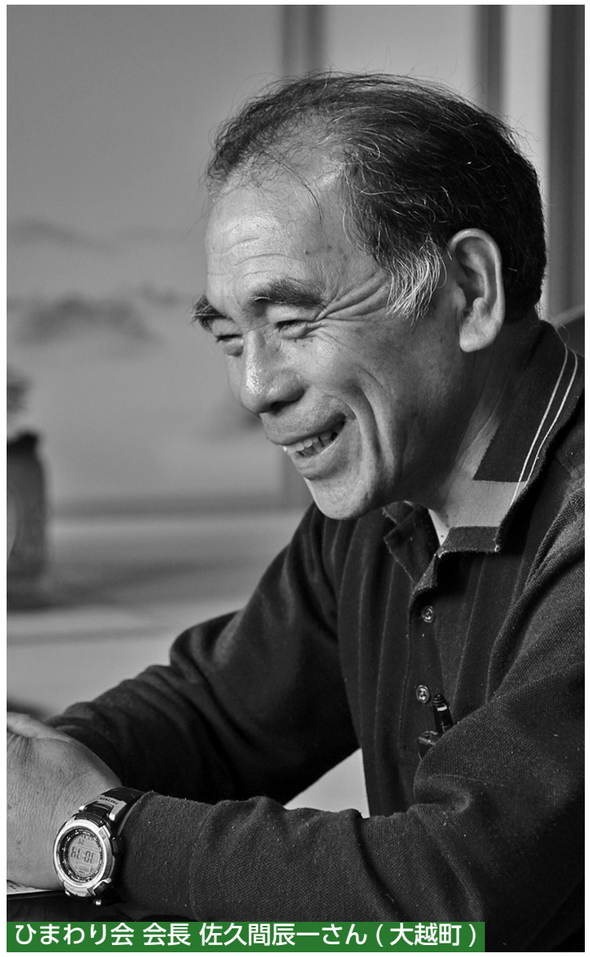
そこで、植栽を通じて、昔のような景観と、花を見て語り合えるような人間関係を取り戻したいと思い、有志16名で平成8年にひまわり会を立ち上げました。

特産品づくりや交流活動も～広がる可能性～

当時のテレビドラマをヒントに、ひまわりの植栽から始めました。地区の約90戸の賛同を得て、国道沿いや川沿いに約5000本のひまわりを植えました。現在は3万本までに増えています。

平成9年からは、地区のシンボルである愛宕山をひまわり会で借り受け、つつじの公園を整備することにしました。山頂では休憩やイベントができ、その他にも高柴山登山道ではアジサイを3000本、近くの工業団地周辺にはコスモスを植えています。

ただ花を植えるだけでなく、特産品づくりや交流活動も行っています。ひまわりのタネから油を絞ったり、茎で杖を作り老人クラブに贈ったり、イベントでは花びらやタネを使った染色体験コーナーも行っています。毎年8月15日に開催している愛宕山での「ひまわりフェスティバル」では、「流しそうめん」「ひまわり写生会」「コンサート」などで子どもたちに楽しんでもらっています。


ひまわり会 会長 佐久間辰一さん（大越町）

佐久間さんは元高校教諭。20年前から、ひまわりをはじめ植栽を通じた地域づくり活動を続けています。知恵と工夫で様々な野菜、果物の栽培に挑戦し、誰もが憧れる「楽しい農業」を進めています。田村市ご当地グルメプロジェクト副代表も務めています。

大越町牧野地区に広がるひまわり畑

取り組んでいるパッションフルーツ栽培

世代を超えたコミュニケーションを大切に

今では地区の全戸が会員となり、役員も30人ほどいますが、その一方で会員の高齢化が問題となっています。発足時は、地区の若連と老人クラブの間の世代が中心となって活動づくりで始めましたが、現在の活動の多くは、老人クラブの協力があってなんとかできています。それでも、役員に若連の世代もいて、若い人の「これをやってみたい」という意見を取り入れるようにしています。

最近では、「ひまわりフェスティバル」と若連の「盆踊り」を同時に開催する取り組みを行っています。どちらも人手が足りなくなっているなか、世代を超えたコミュニケーションを大切にして、協力し合うようにしており、震災後は地区外からの応援者や協力者ともたくさん出会えました。外部との交流も大切にしていきたいと思います。

取材を終えて

現在、東北の地で南国のパッションフルーツの露地栽培にも力を入れている佐久間さん。昔ながらの風景や人間関係を大切にしながら、ひまわりを地域資源にするなど、新しいものを取り入れることにも挑戦されています。

また、佐久間さんには、ひまわり会を始めたときから、何でも相談でき、やろうとしていることを常に応援してくれる先輩がいるとのことです。まさに「人郷夢」を大切にし合う関係があるからこそ、活動が広がっているのだと、お話を伺って感じました。

（協働まちづくり課）

昨年の「ひまわりフェスティバル」の様子